

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：32414

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K03449

研究課題名(和文)性被害の被害者心理と援助要請行動に関する研究

研究課題名(英文)A Study on Victim Psychology and Help-Seeking Behavior of Sexual Victims

研究代表者

齋藤 梓(SAITO, Azusa)

目白大学・心理学部・准教授

研究者番号：60612108

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の結果、被害者が抵抗や逃走が出来ない状態として、身体が動かなくなる強直性不動反応のみならず、相手に合わせるような言動を行う迎合反応や、相手に従う行動をとる従順反応の存在が示唆された。それらが生じる背景として、強直性不動反応や迎合反応には暴力等の恐怖が、従順反応には、相手を信用している気持ちや相手に嫌われたくないという心理などが関係している可能性が考えられた。さらに、特に性的マイノリティが被害者の場合、社会に存在するジェンダーやセクシュアリティに関わる意識が、被害を発生しやすくしたり、被害者の抵抗を抑圧したり、二次的被害を発生しやすくしていることが考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

性暴力被害においては、「なぜ逃げなかったのか」「抵抗しなかったのだから同意があったのではないか」などの被害者非難が発生しやすい。本研究の結果、性暴力被害では、恐怖により身体が動かなくなる強直性不動反応、さらにひどい目に合わないために相手に合わせる迎合反応や従順反応など、様々な反応が生じていることが示唆された。また、ジェンダーやセクシュアリティに関する社会の認識が、被害者の抵抗を抑圧する可能性も考えられた。

こうした様々な反応や抵抗を妨げる背景要因は、これまで、実証的研究ではあまり言及されてきておらず、本研究の結果は、社会における性暴力被害の誤った認識を改める一助となると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The results of this study revealed that when faced with a sexual violence, people experience not only the tonic immobility reaction, in which they are unable to resist or escape, but also the conformity reaction, in which they say and do things to conform to the other person, and the submission reaction, in which they act in accordance with the other person. The background of these reactions is thought to be related to fear of violence in the case of tonic-immobility and conformity reactions, and to feelings of trusting the other person and not wanting to be disliked by the other person in the case of submission reactions. In addition, it was also considered that, especially in the case of victims who are sexual minorities, the awareness of gender and sexuality present in society may facilitate the occurrence of victimization, inhibit the victim's resistance, and promote the occurrence of secondary victimization.

研究分野：臨床心理学

キーワード：性暴力被害 強直性不動反応 犯罪被害 ト라우マ

1. 研究開始当初の背景

性犯罪・性暴力被害(以下、性被害とする)が被害者に与える精神的後遺症は深刻である(Kessler et al., Arch gen Psychiatry, 1995)。しかし、内閣府「男女間における暴力に関する調査」(2017)では、被害についてどこにも(誰にも)相談しなかった者の割合は56.1%であり、被害者の半数以上は、援助要請行動を取っていないという結果が得られた。

齋藤(第56回犯罪心理学会ポスター発表, 2018)は、性被害に直面した時に身体が凍り付いたように動けなくなる強直性不動反応(Tonic immobility)が、被害後の被害者の援助要請行動を抑制することを明らかにした。また齋藤ら(学校危機とトラウマ, 2019)は、性被害者へのインタビュー調査から、被害の際に抵抗しなかったことで「被害について自分を責める気持ち」が生じ、自尊心が低下すると指摘している。このことから、被害時に抵抗しなかった/抵抗できなかったことは、被害者の自責感を強め、援助要請行動を抑制していると推測される。

被害時に被害者が「抵抗できない」状態については、恐怖反応のひとつであるフリーズ反応や周トラウマ期解離として説明されてきた。これまでは、被害者の状態を概念的に説明するにとどまり、実証的研究が少なかったが、近年、周トラウマ期解離の概念から発展した強直性不動反応という概念を用いて実証的研究が行われている。Mollerら(AOGS, 2017)は性被害者に調査を行い、7割近い被害者が被害中に重篤な強直性不動反応を示していることを明らかにした。また齋藤ら(公共政策, 2019)は、強直性不動反応では説明が困難な事例も存在するとし、性被害者へのインタビュー調査から、強直性不動反応が生じていない場合でも、加害者が上下関係を作り出すことや、加害者と被害者のあいだにもともと存在する社会的な関係性によって、被害者が抵抗できなくなることを指摘した。

強直性不動状態の研究は国外では散見されるが、日本ではまだ行われていない。また、社会的な関係性が抵抗を困難にする心理メカニズムについては、小規模調査が行われた段階である。今後、これらの研究を積み重ねていき、「性被害に直面した際に、被害者はなぜ抵抗や逃走ができないのか」をより一層明らかにしていく必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は「性被害に直面した際に、被害者はなぜ抵抗や逃走ができないのか」について、「被害者が抵抗や逃走が困難になる心理メカニズム」および「被害者の抵抗や逃走を妨げる状況要因」を明らかにすることである。

3. 研究の方法

本研究では、上記の目的に従い、当初は3つの調査を予定していた。それらは、A. ウェブを利用した性被害時の状況および性被害時の心理に関する調査、B. 性被害者を対象とした性被害時の「身体が動かない状態」に関する調査、C. 性被害体験に関するインタビュー調査である。しかし、新型コロナウイルス感染症の流行により、Bの研究協力機関であった公益社団法人被害者支援都民センターにおいて、一定期間、対面面接を制限する対応が取られた。そのため、当初予定を変更し、近年問題になっているオンライン上での加害者からの接触から実際の被害に至る経緯に関するオンライン調査、および他の調査の二次分析に、調査内容を変更した。

(1) ウェブを利用した性被害時の状況および性被害時の心理に関する調査

調査対象者

オンラインリサーチ会社に依頼し、モニタ登録をしている20代の女性495名(平均年齢25.62歳, $SD=2.66$), 男性487名(平均年齢25.41歳, $SD=2.81$), Xジェンダー16名(平均年齢24.88歳, $SD=2.58$)から回答を得た。

手続きと測定項目

ウェブ画面で、研究説明および倫理事項の説明を行い、同意が得られた場合のみ回答を求めた。回答はいつでも中止、相談機関一覧へアクセスできるようにした上で調査を実施した。質問内容は以下のとおりである。

- ・フェイスシート(出生時の性別, 性自認, 性的指向, 年齢, もっとも利用しているSNS, SNSの平均利用時間)
- ・オンライン上での性的被害経験
- ・日本語版改訂版出来事インパクト尺度(Asukai et al., 2002)
- ・被害後の援助要請行動を尋ねる質問
- ・脅迫や強要に従わざるを得なかった場合の理由

(2) ウェブを利用した性被害時の Tonic immobility が PTSD 症状に与える影響

調査対象者

オンラインリサーチ会社に依頼し、モニタ登録をしている20代から40代の男性600名(平均年齢30.4, $SD=5.15$), 女性400名(平均年齢29.8, $SD=4.97$)から回答を得た。

手続きと測定項目

ウェブ画面で、研究説明および倫理事項の説明を行い、同意が得られた場合のみ回答を求めた。回答はいつでも中止、相談機関一覧へアクセスできるようにした上で調査を実施した。質問内容は以下のとおりである。

- ・フェイスシート(出生時の性別、性自認、性的指向、年齢)
- ・望まない性的経験、被害時の年齢、加害者の属性等
- ・被害後の援助要請行動に関する情報
- ・Male Rape Myth Scale(MRMS)日本語版
- ・Acceptance of Modern Myth about Sexual Aggression Scale(AMMSA)日本語版
- ・IES-R(Impact of Event Scale-Revised)改訂出来事インパクト尺度日本語版

(3) 性被害体験に関するインタビュー調査

研究協力者

性的マイノリティおよび男性を対象に、望まない性的体験について尋ねるインタビュー調査と被害内容の記述調査を行った。協力者は、性的マイノリティがインタビュー8名、被害内容の記述6名、男性がインタビュー4名、被害内容の記述2名であった。

(4) 性暴力被害経験に関する二次的分析

使用した分析対象データ

NHKが実施した性暴力アンケートのデータを分析対象とした(NHK, 2022)。性暴力アンケートはウェブ上で実施され、主にSNSやメディアを通じて広報がなされた。すべての質問に無回答だったもの、性加害者と名乗るものなどを除き、アンケートの回答総数は、38,383件であった。このうち、被害当事者本人が回答した37,531件(平均年齢32.81歳, SD=8.97)を分析の対象とした。

(5) 日本版 Tonic immobility 尺度作成の再分析

使用した分析対象データ

JSPS 科研費(17K04441)を使用して取得したデータの再分析を行った。ウェブ調査会社にモニター登録している20代から40代の男女各3000名ずつから回答を得た。TIは被害内容を特定して尋ねる必要があるため、回答者のうち性暴力被害経験のある者に尋ねた。従って分析対象は、何らかの性暴力被害経験をしたことがあると回答した男性310名(平均34.37歳, SD=8.24)、女性1237名(平均35.47歳, SD=8.07)とした。

4. 研究成果

(1) ウェブを利用した性被害時の状況および性被害時の心理に関する調査

被害経験率

何らかのオンライン上の性暴力を経験したと回答した者は202名であり、女性116名(23.4%)、男性82名(16.8%)、Xジェンダー4名(25.0%)であった。「望まない性的注目」は女性88名(17.8%)、男性71名(14.6%)、Xジェンダー4名(25.0%)、「ジェンダーハラスメント」は女性65名(13.1%)、男性61名(12.5%)、Xジェンダー3名(18.8%)、「動画像を利用した性暴力」は女性78名(15.8%)、男性53名(10.9%)、Xジェンダー3名(18.8%)が被害に遭ったと回答した。「動画像を利用した性暴力」のみ男性の被害経験率が他のジェンダーに比べて低いが、そのほかの被害ではジェンダーによる被害経験率の偏りは見られなかった。

加害者

それぞれの出来事の加害者について、「望まない性的注目」の場合、匿名のSNSユーザー、SNS上での知り合い、パートナーや配偶者・恋人が多かった。「ジェンダーハラスメント」においても匿名のSNSユーザーやSNS上での知り合いが多かったが、友人という回答も見られた。「動画像を利用した性暴力」では、匿名のSNSユーザーやSNS上の知り合いという回答も多いものの、他の被害に比べパートナーや配偶者・恋人、友人という回答が多く見られた。

トラウマ反応

何らかのオンライン上の性暴力を経験した202名について「もっともショックだった経験」についてIES-Rへの回答を得た。その結果、「望まない性的注目(N=96)」は平均23.64(SD=20.58)、「ジェンダーハラスメント(N=33)」は平均22.52(SD=17.79)、「動画像を利用した性暴力(N=71)」は22.49(SD=20.67)であった。また、被害後、少しでも死にたいと思ったことがあると回答した者は、それぞれ48名(50%)、12名(36.4%)、31名(43.7%)であった。

被害時の反応や行動

オンラインを通して加害者から接触され、相手の脅迫や強要に従わざるを得ない状況に追い込まれたと回答した人は39名(3.9%)であり、脅迫や強要を受けた者のうち、24.7%(平均年齢21.03歳, SD=3.51)が相手の要求に従った/従わざるを得なかったと回答した。そこでは、

相手を信頼している気持ちや、相手に嫌われなくなかった気持ちを利用される場合が多いことが分かった。

これまで、研究の中では被害時に体が動かなくなる Tonic immobility を取り上げてきたが、Tonic immobility は被害直前に発生するものである。被害に至るプロセスの中で、相手からの脅迫や強要で追い詰められるプロセスが存在し、さらに被害者の信頼や好意が利用される場合があると調査によって明らかになった。

(2)ウェブを利用した性被害時の Tonic immobility が PTSD 症状に与える影響

被害経験

言語的な性暴力も含み、性的被害経験があると回答した者は 191 名おり、そのうち、被害時年齢 0 歳の男性 3 名を被害後、相談行動をすることができないと判断したため、189 名を有効回答として分析対象とした。なお、性交を伴う被害は女性が 43 名 (10.8%)、男性は 10 名 (1.7%)、身体接触を伴う被害が女性 87 名 (21.8%)、男性 34 名 (5.7%) であった。

Tonic immobility が PTSD 症状に与える影響

「性的被害経験を受けた人々の IES-R の得点」を目的変数とし、「MRMS」「AMMSA」「被害種別」「Tonic immobility」「被害時年齢」「相談行動の有無」を説明変数とした強制投入法による重回帰分析を行った。なお、「被害種別」はダミー変数として用いた「被害種別」「被害時年齢」「Tonic immobility」が IES-R の得点を説明する可能性が示唆された。

(3) 性被害体験に関するインタビュー調査

インタビュー内容の逐語を文字に起こし、質的に分析した結果、女性を対象とした被害の時と同様にエントラップメント型の性暴力発生プロセスが見られることに加えて、被害者が性的マイノリティであることを加害者が知っていた場合、マイノリティ性を利用する形で加害が行われていることが示唆された。また被害者が男性であり加害者が女性の場合、「男性であること」で被害を回避しにくい様子が見られた。社会における、ジェンダーやセクシュアリティに関わる意識は被害の発生に影響を与えており、さらに、その後の支援や相談のプロセスにおいて、二次的被害を発生させている様子が見られた。

(4)性暴力被害経験に関する二次的分析

被害経験

37509 件の回答中、挿入を伴う被害は 7953 件、身体接触を伴う被害は 26049 件、そのほかの被害は 3507 件であった。

被害時の被害者の状態

被害時に体が動かなかったあるいは声がでなかった人は、37427 件中 14636 件、被害時に体を使って抵抗をしていない人は 37389 件中 13744 件、被害時に加害者に合わせるような言動をした人は 36563 件中 3254 件、被害時に感謝や好意をほのめかすなど加害者を喜ばせるような言動をした人は 36563 件中 3254 件であった。

被害時の被害者の状態と援助要請行動の関連

「被害を誰かに話して(相談して)いない」の回答を目的変数、「回答時の性別」「被害のカテゴリ」「被害年齢/最初の被害年齢」「加害者との関係」「被害時に体が動かなかった・声がでなかった」「被害時に体を使って抵抗していない」「被害時の暴力や脅迫の程度」「被害時に加害者に合わせるような言動をした」「被害時に感謝や好意をほのめかすなど加害者を喜ばせるような言動をした」「PTSD の診断がつく可能性があるかどうか」を説明変数としてロジスティック重回帰分析を行った。その結果、「被害時に加害者に合わせるような言動をした」「被害時に体を使って抵抗していない」「PTSD の診断がつく可能性がある」「被害時に暴力や脅迫が弱い」場合に援助要請行動が低下することが分かった。また、女性、男性、Xジェンダーそれぞれにおいて、援助要請行動が抑制される背景を質的に分析した結果、性暴力に遭ったことを恥じる気持ち、あるいは自分の身に起きたことを性暴力だと認識できない状態が、援助要請行動を阻害していることが分かった。その背景には、自分の身を守るためにとった迎合反応、およびジェンダー規範の影響の存在が推測された。

加害者に迎合するような言動を取った理由

加害者に迎合するような言動を取った理由を検討したところ、なぜだか分からないという回答も一定数見られたが、そうしないとひどい目に遭うと思ったという回答も多く見られた。

(5) 日本版 Tonic immobility 尺度作成の再分析

TI 尺度日本語版では、TIS 解離と TIS 不動の 2 因子構造が得られた。TIS 解離、TIS 不動それぞれの因子は内的一貫性が保たれ、理論的にも整合性が取れていると考えられた。かつ先行研究

の通り PTSD 症状との関係が推測されることが分かり、日本においても TI を測る尺度として利用可能であると考えられた。

なお、TI の出現率は、性暴力被害経験ありと回答した者のうち、女性が 13.99%、男性が 18.06%、挿入を伴う被害およびその未遂被害に該当する者のうち、女性が 26.1%、男性が 31.30%であり、他国の調査に比べるとやや出現率は低かったが、オンラインリサーチの限界とも関係していると考えられた。また、TIS 解離は男性が高く、TIS 不動は女性が高いという結果が得られた。

(6)結果のまとめ

本研究では、「性被害に直面した際に、被害者はなぜ抵抗や逃走ができないのか」について、「被害者が抵抗や逃走が困難になる心理メカニズム」および「被害者の抵抗や逃走を妨げる状況要因」を明らかにすることを目的として様々な調査を実施した。今回の研究の結果、および本科研費取得以前のデータの分析からは、被害者が抵抗や逃走が出来ない状態として、Tonic immobility のみならず、相手に合わせるような言動、あるいは感謝や好意をほのめかす言動をする迎合反応や、相手に従うあるいは従わざるを得なくなる従順反応の存在が示唆された。それらが生じる背景として、Tonic immobility や迎合反応には暴力等の恐怖が、従順反応には相手に嫌われたくないという心理などが関係している可能性が考えられた。さらに、社会に存在するジェンダーやセクシュアリティに関わる意識が、被害を発生しやすくしたり、被害者の抵抗を抑制したり、二次的被害を発生しやすくしていることが考えられた。

今後は、Tonic immobility だけではなく、従順反応や迎合反応なども含めた検討が必要であると考えられる。また、そうした反応が発生する背景には、性暴力被害発生の際のようなプロセスが存在するか、そしてジェンダーやセクシュアリティに関わる意識はその点にどのように関わるかを、さらに明らかにする必要があると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 齋藤梓	4. 巻 21
2. 論文標題 「被害者」を包括的に支援するには？	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 49 - 54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤梓	4. 巻 21
2. 論文標題 社会への信頼や人生を喪失した感覚を抱く人々 性暴力・性虐待被害	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 701-706
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡本かおり	4. 巻 19
2. 論文標題 被害者支援における支援者の二次受傷とその関連概念について 代理受傷とどう向き合うか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 清泉女学院大学人間学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 69-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 齋藤梓・飛鳥井望	4. 巻 20
2. 論文標題 強直性不動反応尺度（Tonic immobility Scale）日本語版の尺度特性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 トラウマティック・ストレス	6. 最初と最後の頁 165-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤梓	4. 巻 19
2. 論文標題 性暴力被害後の相談行動を妨げる要因の検討 - 被害に直面した際の被害者の反応に着目して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 目白大学心理学研究	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 齋藤梓
2. 発表標題 子どもを性犯罪からまもるには 被害者支援の立場から考える
3. 学会等名 日本犯罪心理学会第59回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 齋藤梓
2. 発表標題 性犯罪に関わる刑事法をめぐる議論について被害者支援の立場から考える
3. 学会等名 日本トラウマティックストレス学会第20回
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 齋藤梓・岡本かおり・新井陽子・亀岡智美・飛鳥井望
2. 発表標題 Zoomを使用したTF-CBTの実践報告 有用性と工夫について
3. 学会等名 日本トラウマティックストレス学会第20回
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 齋藤梓
2. 発表標題 被害者支援における認知行動療法的アプローチの活用
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会第48回大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 齋藤梓
2. 発表標題 20代の人々におけるオンライン上の性暴力被害の精神的影響と援助要請行動
3. 学会等名 日本犯罪心理学会第60回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 齋藤梓
2. 発表標題 子どもの性暴力被害に関わる刑法改正を考える - 性的同意（年齢）を中心に
3. 学会等名 日本トラウマティック・ストレス学会第21回大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 齋藤梓・大竹裕子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 224
3. 書名 性暴力被害の実際 被害はどのように起き、どう回復するのか	

1. 著者名 飛鳥井望編著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 日本評論社	5. 総ページ数 208
3. 書名 複雑性PTSDの臨床実践ガイド ト라우マ焦点化治療の活用と工夫	

1. 著者名 合同出版編集部	4. 発行年 2021年
2. 出版社 合同出版	5. 総ページ数 144
3. 書名 私は黙らない 性暴力をなくす30の視点	

1. 著者名 齋藤梓・岡本かおり	4. 発行年 2022年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 248
3. 書名 性暴力被害の心理支援	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>男性の方およびセクシュアルマイノリティの方を対象とした質的調査 https://sve-research.jp/</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	岡本 かわり (OKAMOTO Kaori) (20736425)	清泉女学院大学・人間学部・教授 (33605)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関